第1回岐阜県幼児教育推進会議 会議録

日時:令和7年6月16日(月)13:30~15:30

場所:岐阜県総合教育センター2棟1階 第2研修室

0 岐阜県幼児教育推進会議委員の依頼

1 挨拶 岐阜県教育委員会 義務教育課 課長

2 会長選出

〈会長・副会長挨拶〉

会長: 幼児期に幸せだった子供たちが、30歳、40歳になっても幸せな人生を送っているかを追跡調査で実証した研究がある。何が幸せかは疑問を抱きだしたらきりはないが、この調査はある意味、真実をついている。幸せな幼児期を過ごせば、その後の人生もやはり幸せになるのではないかと思っている。幼児教育を大切にしていってほしいので、協力いただきたい。また、幼児教育の推進には、行政のバックアップが必要である。岐阜県は、幼保小の連携が随分進んでいる。「架け橋プログラム」についても、ますます進展していくことを願っている。

副会長: 予測困難な時代をたくましく生き抜く子供を育てていくためには、幼児教育が大切である。みなさんと一緒に、岐阜県の子供たちを真ん中において考えていきたい。

3 議事

(1) 岐阜県幼児教育アクションプラン「ぎふっこ」すこやかプラン

(2) 「岐阜県幼児教育アクションプラン『ぎふっこ』すこやかプラン」に基づいた「つなぐ・高める・支える」幼児教育の推進に向けた関係事業・研修

〈関係事業・研修の内容や進め方等についての意見交換〉

会長: 各所属、立場から、関係事業や研修等について意見を聞きたい。

委員: 公私立共同研究については、公立幼稚園長会加盟の28園、私立幼稚園加盟園95園から、毎年2園が指定園となり、研究を進めている。この事業は、公立園と私立園が、共同で研究を進めるという点でとても意義がある。しかし、研究の進め方や研究の内容については、今後検討していく必要がある。加盟していない園やこども園も巻き込みながら、岐阜県の子供たちを真ん中にして、幼児教育を考えていく事業にしていきたい。

委員: これまで積み上げられた、「つなぐ・高める・支える」はとても大事なことである。私の地域でも園小中の連携会議を開いている。先日小学校へ授業参観に行ったが、教室にポツポツと空席があった。不登校が問題となっているが、小学校入学後、授業に適應でき

ない、困り感がある子がいる。園児のときから、早期発見、早期対応し、小学校に送り出してあげる必要がある。そのためにも、保護者に園での姿を包み隠さず伝えている。

委員：療育を行っているが、時間が短いのではないかと考えている。また、集団生活の中で子供たちを育てることは大切なことである。異年齢を含む集団の中で、自分たちでトラブルを解決できる子供たちを育てていきたい。そのような保育をするには、研修が大変重要である。岐阜県は、全国と比べ、経年研修、テーマ別研修等、研修体制が充実している。研修内容を生かして保育していきたい。

委員：多様性が認められる社会をつくろうと考える中で、特別支援学校のように学生の期間を分けて生活することに疑問を感じている。特別支援学校の児童生徒は、地域の学校に通ってはいない。災害が起きたとき、地域の人たちが見てくれないのではと、不安を感じる保護者もいる。多様性を認めていくことが、理解し合いながら生きていくことにどう繋がるのかを考えていくべきではないか。

委員：研修が充実しており、先生方が、自分が受けた、伸ばしたいと思う研修を十分に選ぶことができ大変ありがたい。また、幼保小連携の指定も受け、つながりが強化されている。しかし、「幼保小の架け橋プログラム」は作成しているが、「架け橋期の教育課程の工夫」という点では課題が残る。小学校が一方的につくるのではなく、小学校の先生がもっと園の様子を見ることで、教育課程を工夫していき、園と小学校とのよりよい連携を図っていきたい。

委員：幼児教育と小学校教育をつなぐ取組の強化に注目している。私の地域では、毎月1回園長校長会が開かれている。小学校の近くにある幼稚園と、授業参観等の交流をしているが、本校職員が「幼児期の終わりまでに育てほしい姿」について全員理解しているのかは疑問が残る。1年生の担任だけでなく、校内全体で共有していきたい。会議を重ね、スタートカリキュラムを行っている小学校の新聞記事を見たが、各学校の実態に応じて教育課程を工夫していきたい。

委員：研修がとても大切であるが、研修に参加する時間の確保や、研修への参加人数が限られる。研修に行くためにも、人材の確保が大切である。先生は、命を育てる、預かる仕事でもあるので、その重要性をもっと訴えていくとよいのではないか。

〈事務局より〉

主管：幼保小の連携の必要性を強く感じている。国の「架け橋プログラム」事業を受け、指定園、学校に協力をいただき、貴重な実践を作り上げることができた。指定園、学校の先生方は、初め、どうやって連携するとよいのかと戸惑いからのスタートだったが、3年間の取組を通して、連携の必要さを実感したと聞いた。連携の最初の1歩をどう踏み出すかも含め、今年度は、その実践の成果を県内に広げていくことが重要だと考えている。先ほど公私立共同研究について話があったが、そちらについては、今後、持続可能で意味ある推進事業となるように考えていく。

(3) 「次期岐阜県幼児教育アクションプラン」の策定計画

〈「次期アクションプラン」策定に向けての質問・意見〉

会長： アクションプラン策定にあたっての実態調査についてご意見いただきたい。

委員： 研修が充実されていることが大変心強い。発達障がいのお子さんに対する研修があるが、子育てしづらいお子さんなど、障がいがあるなしに関わらず支援は有効である。特別支援に関わる先生以外の先生も研修を受講していただきたい。

会長： 特別な支援を必要とする子供たちの保育をしていく中で、保育者の側がどれほどの困り感を持っているのかを調査していただきたい。また、その中で、若手の先生は苦しさを覚えているのではと考えると、その困り感を年代ごとに分けることもできるのでは。

委員： 多様な子供がいる中で、食物アレルギーや医療的ケア児の調査もしていただきたい。

委員： 幼保小連携は、先生方の意識の差が大きい。今回の実態調査で、これまでと比べてどのくらい意識が変わっているのか知りたい。

委員： 1つの地域に1つの学校と園があるところは連携しやすいが、1つの園から複数の小学校へ入学する場合や、複数園から1つの小学校へ入学する場合は、連携が難しい。その部分の実態が明らかになるとよい。

委員： 支援が必要な子供に対して、対応は多様だが、その中で先生や、周りの子も含め、その子のことをどれだけ理解していけるか、それを繋いでくれる大人が近くにいるか等、幼保園から小学校へ困り感が無いよう、自分が尊重されて、楽しく過ごせる環境をどう作っていくかが一番大事である。調査の中で、この架け橋カリキュラムが推進されることで、子供たちの困り感を減らすことができているかが見えてくるとよい。

委員： 研修の内容について、幼児理解や、保護者との関係について先生方の関心が高い。それを踏まえて、研修を進めていただきたい。

委員： 架け橋プログラムに関して、子供や保護者の声を聞くような調査はできないか。

委員： 園で、学校で、どういう子供を育てるか。困り感を持つ子を、療育から小学校にどうつなげるか、どの子供にも目をかけていただき、集団の中で育てていく意識が大切である。また、次期アクションプランの作成後、それをどのように周知するかが大事である。

〈事務局より〉

主管： 現行アクションプランには、特性のあるお子さん、困り感のあるお子さんの支援について項目が設けてある。今回いただいた意見を今後の実態調査に生かしていきたい。また、複数園から1つの小学校に入学する実態を考慮したプランを考えていきたい。

担当： 特別支援の観点から研修内容について、ご意見を伺った。今後、いただいた意見をもとに、研修についてよりよいものにしていく。また、夏に実施する実態調査について関係各所の協力をお願いしたい。

担当： 昨年度、会長より幼児教育センターについてご示唆をいただいた。今年度、アクションプラン策定と並行して、岐阜県の幼児教育センターの在り方について検討していく。現

在、他県の状況について調査している。今後の会議において、進捗を報告させていただく。

〈会長まとめ〉

会長： 3点私の考えを述べる。1点目、幼児教育というのは、最終的には幸福感というか、幸せは何かというところにある。幸せは個人が決めるもので、何がいいかというのは一義的には決まらない。だが、幼児教育の世界では、幸せとは、生きるに値する人生が待ち受けているっていうことを予感できるかということだと考える。自分と他者、人や自然との関わりを深めて、そして、楽しさを実感できるような人間になることではないか。2点目、スタートカリキュラムを少し幼児教育の側に引き寄せられないかということである。生活科ばかりではなく、音楽や図工の中に、幼児期の遊びを発展したものを入れていただくという工夫をする。あせって1年生にする必要はない。スタートカリキュラムを少し幼児教育よりにすることが大切である。3点目、ちゃんと遊べる子にすることである。一生かけて遊べることを見つける。例えば歌手にならないのに音楽をやったり、絵描きにならないのに美術やったり、そこでやっていてよかったと思えるような瞬間を持つことができる。それは、広い意味での遊びである。幼児教育の本質である遊びのエッセンスを、小学校の先生方にも理解していただきたい。

4 諸連絡

- (1) 第2回岐阜県幼児教育推進会議について
- (2) 債権者登録について